

益田市長
山本浩章

今から70年前、第一次中東戦争で激しく敵対したエジプトとイスラエルに休戦を合意させた人物は、ラルフ・バンチというアフリカ系アメリカ人でした。

バンチの幼少期は孤独と貧困と差別に満ちていました。早くに両親を亡くし、元奴隷の祖母に引き取られ、ロサンゼルスで最も犯罪の多い貧民街で成長しました。働きながら高校で学んだ後、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)を総代として卒業し、ハーヴァードの大学院に進学しました。このとき学資を出し合い支えてくれたのが米国内の黒人仲間でした。黒人初の政治学博士となったバンチは、国際連合憲章の起草にも携わりました。

1948年5月に始まった第一次中東戦争は大きな国際問題となり、国連が調停に乗り出すことになりました。最初に調停官として派遣され

たベルナドッテ伯爵が過激派によって暗殺されたのを受け、当時45歳のラルフ・バンチが後任となりました。

舞台をエーゲ海のロードス島に移しての調停は難航を極めました。聖書の時代からの宗教対立に加え、安易な譲歩を許さない強硬な世論が背後にあったのです。両国の代表団は会場の廊下ですれ違っても顔を背け、交渉の場に同席することすら拒みました。そのため双方と個別に折衝を進めましたが、両者が納得できる妥協案を示すことは至難の業でした。バンチは、いったん停戦が実現しさえすれば後で細かい文言解釈を巡って戦闘が再開されることはないと考え、互いが都合よく解釈できるような文面を練り上げました。あえて食事休憩を取らず、協議を深夜まで長引かせ、疲れ果てた双方の代表から少しずつ譲歩を引き出したこともありました。

6週間の交渉の末、1949年2月24日、停戦協定が締結されました。翌年バンチは黒人初、しかも史上最年少(当時)のノーベル平和賞受賞者となりました。その後は大学で教鞭を取ったり、黒人公民権運動に関わったりする一方、1971年に亡くなるまで国連の職員として世界平和に貢献し続けました。

4月号から「中世益田講座 益田氏 VS 吉見氏 編」(全7回)を掲載します。

【問い合わせ先】市文化財課 ☎31-0623

益田市の文化財の紹介

第3回 つしまけかなやごもんじよ 津島家金屋子文書

古代から近代までの日本で行われていた製鉄業たたら製鉄。最も盛んに行われていたのは中国山地であり、特に出雲や石見でした。それはたたら製鉄に必要な砂鉄と木炭をこの地域が豊富に産出したからであり、多くの人々がたたら製鉄に関わって生計をたてていました。

石見西部では、現在の浜田市三隅町井野が砂鉄の一大生産地で、井野の砂鉄が各地のたたら場に送られ、鋳物用の銑鉄(炭素含有量が高い鉄。硬いが衝撃を受けると割れやすい)が生産されました。製品は大阪や広島、九州などに流通し、「石見銑」としてブランド化していました。

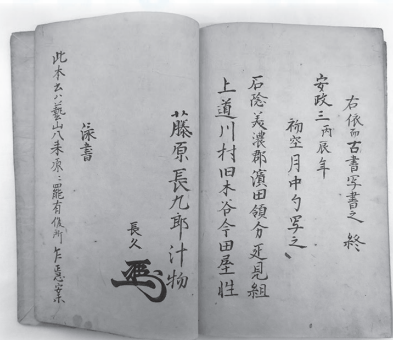
益田市域でも豊富な材木を活かして、たくさんなたたら場が設けられました。匹見町道川白木谷の本谷山たたら跡や美都町宇津川大鳥の大鳥たたら跡が市指定史跡になっています。

たたら製鉄に従事した人々が信仰したのが金屋子神です。金屋子神信仰は中国地方一円に広がっており、安来市広瀬町にその総本社とされる金屋子神社があります。金屋子神は女神とされ、犬、鳶、女性を嫌い、藤、蜜柑、

死体を好むといわれます。

白木谷の津島家に伝わった金屋子神信仰に関する文化財が「津島家金屋子文書」です。和綴「津島家金屋子文書」の本1冊で、表紙には「金屋子神秘録 全」とあります(正確には「金屋」は金偏に「屋」)。内容は金屋子神の由緒や祭文等、多岐にわたります。奥書によると、安政3(1856)年に浜田藩領正見組上道川村白木谷の藤原長久(屋号今田屋)が写したものを、「石ハマ」の住人青木義盤が写したとあります。

独特の内容を持つことから、同様の金屋子神信仰を伝える文書を比較することで、この地域の信仰の特徴を明らかにできると期待されています。



津島家金屋子文書の奥書の、

藤原長久が写したと記されている部分